

本シンポジウムの概要

二〇〇九年度の比較思想学会第三六回大会では、「回復とは何か——医療の場における比較思想の意義——」というテーマで、シンポジウムが行われた。パネリストは、森下直貴（浜松医科大学教授、倫理学）、浅見洋（石川県立看護大学教授、宗教哲学・医療倫理）、大林雅之（東洋英和女子大学教授、生命倫理学・死生学）の三氏で、司会を私小出が務めた。時間は全体で午後二時二十五分から五時までの約二時間半であった。はじめに提題者がそれぞれ二五分程度の発表をした後、パネリスト間で論旨を明確にするための質問とそれに対する回答が簡潔に行われた。一〇分間の休憩を挟んで、フロアとの質疑応答が行われた。質疑応答は、休憩時間にあらかじめ聴講者から提出してもらった質問に、各パネリストが回答するという形式で進めた。最後に司会が全体の総括をして、本シンポジウムは無事終了した。

小出 泰士

最初に発表したのは森下直貴氏で、タイトルは「生命と回復——健康概念を中心に——」であった。ヴァイツゼッカー、カンギレム、ベルクソン、西田幾多郎らの思想を引用しつつ、回復をキーワードに氏独自の健康の哲学を展開した。氏は、生命は絶えず変化しており、元の状態から遠ざかってはまた元の状態に回復するという循環を生の実相ととらえ、回復すべき健康の規準が必要であると主張する。ただしその規準は固定的なものではなく、規準自体時とともに変化してゆく。そして、何を規準とみなすかの根拠は、あくまでも本人の自己感覚にしかないという。不健康な状態から回復したとき、その回復された状態について個々人が持つ感覚が「安らぎ」であり、それこそが健康の規準にはかならない。「安らぎ」のほかに氏が挙げる規準は、自分の慣れ親しんだものが自分の周囲にある居場所、日々のささやかな目標や希望

があること、見守ってくれる誰かとのささやかな結びつきがあること、死者のリアリティの捉え方、である。氏は、常に変化するこれら動的な基準をいかに維持・確保するかが人生の課題となると主張する。

次に、浅見洋氏が「グリーフケアにおける回復とは——死者との関係をめぐって——」というタイトルで発表した。氏は、フロイトの定義に従って、愛する者を失った悲嘆からの回復過程を悲哀と呼び、この悲哀に関して、フロイトの解釈と西田幾多郎の解釈を対比して論じた。フロイトは、悲哀を、死別直後の喪失対象への過剰な固執が徐々に減っていく過程ととらえた。その最終段階として、喪失対象を無価値なものとし、死者との関係を断ち切り、別の対象との新たな関係を構築できた時に初めて、人は悲哀から回復し、安定した心理状態と日常生活を取り戻せると考えた。それとは対照的に、西田幾多郎は、死者の思い出を心に刻むという形で死者との関係を保ち続けること、痛切な悲哀を保ち続けることにかろうじて慰めを見いだしている。西田にとって、回復とは、悲哀自身の根源的な回復力によって、悲哀がその極限において一つの慰安へと転ずる不可思議にはかならない。こうした考察を経て、氏は、グリーフプロセスを「我—汝の関係が生者と生者の関係から、生者と死者の関係へ変わりゆく過程」「他者なる死者との関係として生者が自己の日常を再構築していく過程」ととらえている。ところが今日、日本文化に特有の宗教儀式が形骸化

するとともに、他界に関する観念が消失しつつあるために、かえってその代償としてのグリーフケアが必要な時代になった、と指摘する。

最後に、大林雅之氏が「再生医療「死体からクローン」——生物学的概念と社会的概念の混乱——」というタイトルで発表した。氏は、科学技術の発達によってもたらされた倫理問題、とりわけES細胞の樹立とそれに続くiPS細胞の作成に由来する倫理問題について紹介した。ES細胞は、身体の様々な細胞に分化させることができる（万能性、多能性）ことから、再生医療の材料としての医学的有用性が大いに期待されている。この場合の再生医療とは、例えば、ES細胞から分化させた細胞を、機能の低下した臓器に注入することで、臓器の機能を元通りに回復させようとする医療である。だが、ES細胞を作成するためには、人間になる可能性（全能性）を秘めたヒトの初期胚を破壊しなければならなかったため、倫理的な是非が問題となってきた。そうした中、皮膚の細胞から作成されるiPS細胞の登場は、胚の生命を滅失せず、体細胞からES細胞と類似の多能性細胞を作成できるためにES細胞を作成する際の倫理問題を回避できるものとして大いに世間の注目を集めた。だが、理論的には技術の進歩により今後iPS細胞も全能性を獲得する可能性は大いにあり、完全に倫理問題が回避されたというわけではない。これらの先端科学技術は、人格を備えた人間の誕生に人為的な操作を加えるという点で、宗

教的な観点からの考察も必要であることが指摘された。

以上、三者三様の角度から、健康の回復ということに關して發表がなされた。森下氏は哲學的見地から見た健康の回復、淺見氏は心理的プロセスとしての悲嘆からの回復、大林氏は科學技術による身體機能の回復というように、それぞれまったく領域も異なり問題の方向性も異なる。だが、たとえ無意識裡にもせよ、三者に共通する問題意識があるように思われる。それは、このまま従来の科學的医療の道を突き進むことはもはや人間精神にとつて限界に来ており、その行き過ぎにより生じた現代医療のひずみ、きしみを乗り越える道を模索しようとする意識である。

西洋醫學は、解剖學とともに發展してきたことに象徴されるように、目で見て手で触れることのできる身體を手掛かりとして病氣の回復にアプローチしてきた。その背景には、デカルトやガリレオに代表されるような、あらゆる自然を物質の相互作用として説明しようとする機械論的自然觀があるといわれる。人間の身體も例外ではない。例えばデカルトは、動物の身體を、徹底的に時計仕掛けのような機械として理解しようとした。もちろん身體は生きた物質であるので、まったく惰性的な物理的メカニズムと同一視することはできない。とはいえ、科學である醫學は、身體に關しても、物質界と類似的普遍的法則性を探究した。例えば、インシュリンを投与すれば血糖値が下がることは、物理化學的法則性でこそないが、いわば生理學的法則性と言つてよい。こうして

身體を構成する様々な機能に法則性を見いだすことにより、身體を画一的なメカニズムの集合として理解することが可能となった。身體の個性を捨象し、身體を誰にも共通のメカニズムとして理解することにより、同一の手法による広範圍の治療が可能となった。例えば、同じ抗生物質を投与することにより、地球上のすべての肺結核患者を治療することが可能となった。臓器が機能不全に陥れば、他人の不要となった臓器と交換することで、生き続けることが可能となった。すべての人の身體が同じメカニズムで働いている、また、同じ感染症はすべての人に同じメカニズムで発症するとみなすことにより、人類はこうした治療の高い効率性を手に入れ、現代醫學は病氣を克服することにかんがりの成功を収めた。西洋醫學が世界中の人々の信頼を勝ち得たのは、まさしくこうした人體の機械論的な理解による個性の捨象のおかげなのである。もちろんその恩恵に對して、人類はどんなに感謝してもしすぎることはない。

だが、そもそも人間は單なる機械ではない。治療のためとはいえ、人間を機械と見立てるには、暗黙のうちにまず精神を切り捨て、次いで身體の生命性や個性にある程度目をつぶるという手続きを必要とする。そうして、身體をどこまでも機械的なメカニズムとみなそうとすれば、現実の生身の人間との間に不整合が生じてくるのは當然であらう。現代の医療不信の隠れた深い原因はまさにここにあるのではなからうか。

三人のパネリストによる提案は、いずれもこうした現代の行き過ぎた科学的医学によって生み出されたひずみ、きしみに対する処方箋であるように思われる。

森下氏は、患者本人の実感としての身体感覚にしか健康の拠り所はない、とはっきりと述べた。つまり、科学的な医学によりたどるメカニズムとしての身体がいくら機能を取り戻したところで、それは必ずしも健康とはいえない。患者本人が心を備えた丸ごとの人間として、安らぎを覚え、自分の居場所を持ち、周囲の人々と親密なつながりを持って初めて、人間は健康を回復したと言える、というのが氏の伝えようとした真意であろう。氏は、科学的医療の部品主義から脱却し、人間の全体性を回復することを目指している、と言ってよい。

浅見氏は、悲嘆からの回復とは死者との関係を断絶して他の人との新たな関係を結ぶことにあるという、フロイトの浅薄ともいえる機械的解釈に対し、率直に疑問を呈している。総じてフロイトは、人間の心を対象としながらも、精神分析学に学問としての地位を確保しようとしたために、心のあり様をあまりにも機械的に図式化しようとした。それに対し、氏は、西田や田辺の哲学的思索を拠り所として、悲嘆からの回復とは、決して悲しみを忘れることではなく、あくまで悲嘆の中に沈潜し、亡き愛する者と新たな関係を築くことのうちにしかない、と主張する。氏は現実に対する確かな手応えに基づいて、悲哀とは「喪失した不在の我が

子が現存するという矛盾」にはかならないという、日本文化が独自に紡ぎ出した逆説的な悲哀のプロセスについて語っている。

大林氏は、科学技術の発展によって、元来機械としての人間の部分的な修理にすぎなかった西洋由来の医療技術が、今日では、人格としての丸ごとの人間を生み出そうとしていることに、正直に驚くとともに、人間の分際を超えた神をも恐れぬ仕業に倫理的警鐘を鳴らしている。

このように、いずれのパネリストも、現代の科学技術に偏した社会の中で、私たちが当然のこととして受け入れている現代医学による健康回復のあり方に疑問を呈し、その行き過ぎた科学性を告発している。そして、今の科学的な医療のままで本当によいのか、将来の人類にとって本当に豊かな社会とはどのような社会なのかということを、パネリストのそれぞれが固有の仕方で見識に真剣に問いかけ、その方向性を示唆したという点で、きわめて有意義なシンポジウムであった。

(こいで・やすし、生命倫理学、芝浦工業大学教授)